

## 「項王笑曰、『天之亡我、我何渡為』」

### などについての若干の問題

吉 原 英 夫

「漢文学会会報」が「中国文化―研究と教育」と名称を変更してから、漢文教育をテーマとする座談会の記録が三回にわたって掲載された。この三回の座談会で、五十七年度改訂、指導目標、入門期指導、教材の精選、副教材、国

語科の中での漢文、鑑賞指導、語法指導、読書指導、訓読、朗読、指導者の力量などの問題が取り上げられ、漢文教育に関する問題点はほぼ洗い出されたと言える。今後、本誌において漢文教育を論ずる場合、この三回の座談会で提出された問題を、現場の実状をふまえ、具体的な教材に即して考えていくというのが自然な流れであろう。ここでは、『史記』項羽本紀の項羽の最期を記した文章について、読解・鑑賞・語法の面から若干の問題を提起してみたい。

『史記』のこの部分を取り上げたのは、前記の三回の座談会でもしばしば話題になっていたように、教材としてきわ

めて馴染みの深いものであるにもかかわらず、私にはこの教材についての従前の解釈・説明に二、三納得できない点があり、それを提示して諸賢の御教示を仰ぎたいことによる。

すでに周知の箇所ではあるが、念のためこれから問題にする文章を次に示しておきたい。

於是、項王乃欲東渡烏江。烏江亭長、檣船待。謂項王曰、江東雖小、地方千里、衆數十萬人。亦足王也。願大王急渡。今獨臣有船。漢軍至、無以渡。項王笑曰、天之亡我、我何渡為。且籍与江東子弟八千人、渡江而西、今無一人還。縱江東父兄憐而王我、我何面目見之。縱彼不言、籍獨不愧於心乎。

この文章の眼目は、長江を渡ろうとしていた項羽が、一転して渡らない決意をした「天之亡我、我何渡為」にあると考えられる。「天之亡我」と同じ認識は、垓下で漢軍と諸侯の兵に包囲されたとき、「時不利兮」とすでに生まれており、東城においても、「天之亡我、非戦之罪也」を二回繰り返している。まず、この「天之亡我」について考えてみたい。この把握の仕方が項羽像のとらえ方に影響するからである。

司馬遷は項羽本紀論贊で、「天之亡我、非戦之罪也」について手厳しい批判を加えている。「自矜功伐、奮其私智而不師古、謂霸王之業、欲以力征經營天下、五年卒亡其國、身死東城、尚不覺寤、而不自責過矣。乃引天亡我、非用兵之罪也。豈不謬哉」と。司馬遷によれば、項羽敗北の原因は時勢の要求を汲み取らず、私智・力征にのみ頼ったところにあるのであり、それを天のせいにするなどというのはとんでもない誤りだと言うのである。また、「項羽の常人を超越した勇力と才氣に対する自負は、現実の蹉跌による不幸の到来をも、天の差配に帰してしまふ」と説明するのも、司馬遷の指摘を踏襲したものであろう。たしかに司馬遷の指摘は歴史的判断としてはもっともであり、情に溺れることのない史眼の鋭さを証するに足るものであるが、も

っともであると首肯する前提として、二点ほど押さえておくべきことがある。一つは、国の興亡や個人の成功・失敗の原因を天に求めるという思考方法は、なにも項羽一人に限ったことではないこと、もう一つは、連戦連勝の將軍項羽が戦いに対する自負を持つのは当然であり、その実績に保証された戦いについての考え方からすると、敗北の原因を自己の作為を超越した天に求めたのにはそれなりの理由があったこと、の二点である。

いったい項羽は垓下で包囲されるまで、自分が指揮した戦闘で敗北を喫したことは一度もないし、もちろん逃亡したこともない。「吾起兵至今八歳矣。身七十余戰、所當者破、所擊者服、未嘗敗北」と豪語するように、戦いの強さは抜群なのであった。この点は劉邦ときわめて対照的である。劉邦は敗北に敗北を重ね、「鴻門之会」で厠にゆくのを機会に逃亡したように、逃げの名人であった。楚軍に追われ、「漢王急。推墮孝惠・魯元車下」と自分の子供を馬車から突き落としたりもしている。披山蓋世の常勝將軍項羽が追いつめられ、敗走するようになったのは、『史記』の描くところによれば、慢性的な食糧不足・策謀のなさ・人心の遊離による。特に食糧不足には悩まされ、「彭越數反梁地、絶楚糧食」「彭越復反、下梁地、絶楚糧」「漢兵盛

食多、項王兵罷食絶」「楚兵罷食尽」「兵少食尽」と執拗に記述されている。<sup>(4)</sup>そしてこれらは、結局、項羽の戦いについての考え方に起因する。武將項羽にとって、戦いというのは兵と兵との直接的戦闘を意味するのであり、それ以外の恒久的補給体制の確保とか人心の掌握とか策略とかは二次的意味を持つにすぎなかった。項羽と劉邦が広武山を前にして対峙したとき、項羽が、「天下匈匈数歳者、徒以吾兩人耳。願与漢王挑戰、決雌雄」と一対一の勝負で漢楚の勝敗を決めようと申し出るが、劉邦に「吾寧鬪智、不能鬪力」と嘲笑され、肩透かしを食った話は、そのことを象徴的に示しているよう。これに対し漢軍側は甬道を築いて食糧を補給し、関中との輸送路を確保して関中から人と物を送り続け、それが敗北してもすぐに立ち直れるバネとなった。老将劉邦もまた、張良・陳平の献策をよく用い、三老制度などにより人心の収攬に努めた。項羽は、漢軍のこの頭脳作戦と物量作戦を基盤とする持久戦によって、個々の戦闘には勝ち続けながらも最後には窮地に陥ったのである。戦闘によって敗北したわけではないのである。したがって項羽には戦いによる敗北意識はなかったと推測される。自分でもよくわからないが、あっという間に追いつめられ、いかんともしがたい時勢の流れによって破滅への道

を歩ませられていると思うのは、無理からぬことである。それを「天之亡我、非戦之罪也」と表現しているのである。そして、天が楚を亡ぼすという認識は項羽だけではなく、敵側の漢にもあった。漢楚の間に協定が結ばれ、項羽が東歸したとき、漢の張良・陳平が「楚兵罷食尽。此天亡楚之時也」と言っている。これは、あれほど強力だった楚軍が急激に弱体化し、打倒する絶好の機会が訪れたことを自分たちの思慮や作為を越えたものとみなしての発言なのである。項羽の敵も、項羽敗北を「天の差配」に帰しているのである。これが漢楚の興亡という歴史の中で生きた人間の実感であったのである。

司馬遷は当然以上のことをふまえて、なおかつ後世といういわば歴史の高みから、冷徹な眼をもって、手厳しく、鋭い批判を浴びせているのである。この点を押さえないで、敗北の原因を「天の差配」に短絡したというように結論のみを投げ出されると、<sup>(5)</sup>極端な場合には、項羽は「一切を天命で誤魔化さうとする」、<sup>(6)</sup>ずいぶん無責任・無反省な人間ということになり、すぐあとの「何面目見之」という責任感ある発言とも矛盾するばかりか、歪曲化された項羽像が成立するということになる。

以上のことを確認して、まず問題にしたいのは、項羽が烏江まで馳走したのはいったい何のためだったのかということである。「揚子江を渡って逃げのびるつもりで来た」という説明もあるが、どうであろうか。すでに記したように、垓下において包囲されたとき、「時不利兮」と歌っており、また、東城において数千騎の漢軍に囲まれたとき、さすがに勇猛を誇る項羽も、「自度不得脱」、「今日固決死」と助かる見込みのないことを述べている。しかも「天之亡我」「天亡我」と繰り返しているように、それは自己の努力ではないかんともしがたい天の意志であることを自覚していた。自己の滅亡をそうに考える以上、いつとき生きのびることができようとも、長期的・戦略的には亡びてゆくほかないのである。そのことを自覚しながらも、垓下を脱出し、東城において数千騎の漢軍を相手に戦闘したのは、「非戦之罪也」ということの証明、武將項羽にとっての自己の存在の最後のあかしにほかならない。死を覚悟し、自己の存在を証明し終えた項羽を烏江まで馳走させたものは、いったい何であつたのか。おそらくそれは望郷の念であつたらう。呉中を出てからすでに七年。各地を転戦し続け、項羽は一度も故郷に帰っていない。咸陽を破壊し

たあと、関中に留まらずに東帰し、司馬遷に「背関懷楚」（項羽本紀論贊）と批評されたように項羽の東帰志向は強い。追われる項羽の胸中にあるものは、もう一度生地の水村山郭を見たい、自分の育った大地を踏みしめたい、項氏の一族や郷党に会いたいという思郷の念だけであつたと推測できよう。それが漢軍に追われ、無我夢中で逃走する項羽の方向を決定したということであり、「逃げのびるつもり」というほどには明確な意志があつたとは思われない。このことは烏江をいったんは渡ろうとしながらも、一転して渡らない決意をすることとも関連しよう。

さて、やっとの思いで烏江に辿り着き、「於是、項王乃欲東渡烏江」。烏江の亭長は敗走して来た項羽らを見てすぐに事態を了解し、船を出す用意を始める。この「烏江亭長、檣船待」を、項羽が到着する前から船を準備して待っていたとするのは不自然である。垓下から烏江まで二百キロ以上、項羽が敗走して烏江へ向かっているという情報に、疾走する項羽の到着以前に烏江の亭長にもたらされるはずがない。亭長は項羽たちの姿を見て、あわてて船の用意をし、項羽が乗るのを待ったと解するのが常識的である。<sup>(7)</sup>

そして亭長の発言。「江東雖小、地方千里、衆數十万人。

亦足王也。顧大王急渡。今独臣有船。漢軍至、無以渡」と。  
この発言は敗將に対してとはいえ、一介の亭長の発言としてはまことに異例なものである。もし項羽が急いで江を渡ろうとしているなら、「亦足王也」とか「顧大王急渡」などと発言するはずがない。わざわざ亭長がこのような発言をしなければならなかったのは、烏江に到着していったんは「欲東渡烏江」した項羽が、その後、渡るそぶりを見せなかったことによる。「横船待」と「謂項王曰」との間に、かなりのまがあると考えるのである。

「西岸のよしあし青を描いて、江南の春色を示してゐる。柳暗の箇所そこには必ずささやかな百姓家がある。水牛を追うて口笛をすさむもの、鋤鎌を肩にして春風に酔ふもの、太平の気象と簡古の風俗と漫々たる水<sup>(8)</sup>」というなつかしき江南の山河を眼前にひかえ、項羽はほっとしたであろう。と同時に、今までは追われながら故郷恋しさの一念で馬を駆り、なんらの余裕もなかったわけだが、渡し場を前にしてこれからの事態の成り行きについて考えたに違いない。江を渡ることではできる。しかし江を渡っても漢軍は追跡してくるにきまっている。そうすればまた戦闘となる。が、江南の人々を巻き添えにして戦っても、終局的に勝つ見込みがあるわけではないのである。それにもまして

気にかかるのは、故郷の人々が敗將の自分をどう迎えるかである。長江を前にして項羽はじっと立ったまま動かないのである。あわてたのはすでに船の用意をし終えた亭長である。漢軍は当然追跡してくる。早く渡らせなければならぬ。項羽の躊躇を吹っ切るように亭長は懸命に説得するのである。それが「江東雖小……」という発言なのである。この必死の懇請を聞いて、逆に項羽は渡らない決心をしたのである。

そして「笑」って発言する。すでに武田泰淳氏が、『項羽本紀』には『怒る』と云ふ文字がよく出てくる。何かあると項羽は怒る。そして動作を起すのである。……まことに項羽の怒りははげしい。怒りにかりたてられて一生を終ってゐる。『笑ふ』などと云ふ文字はほとんど見えない。項羽はいよ／＼自分が最期をとげる前に一回笑っただけである<sup>(9)</sup>と指摘しているが、怒りの項羽が生涯でただ一度だけみせた笑いが、この笑いである。この笑いについては、本誌の座談会で、大木春基先生が、「あの最後の笑いは非常な意味を持っていて、そしてまた、それが解って初めて、項羽の憎悪というものが、掴み取れるんだし、また史官司馬遷のその意図も判ることになるんだし……」と述べておられる。

この笑いは、いったいどういう笑いであったのか。陳舜臣氏は、「項羽はおだやかに笑っている」とし、T社の『漢文（古典Ⅰ乙）下』の指導書は、「項羽は天を信じた武人である。亭長の申し出に對し、彼は笑ってそれを辞退している。この『笑』こそ、天命の去ったということに素直であらうとする英雄の、清潔な笑いではなかったか」と解説している。また、丸山松幸・和田武司氏は、「項王は寂しく笑った」と訳し、田中謙二氏は、「自嘲の笑い」と解している。中国の于在春氏は、「項王哈哈大笑」と現代漢語に置き換え、「西楚霸王的最後一“笑”、要訳出激情来」と注を付している。そもそも「笑」という言葉は、「○歛笑。易旅“旅人先笑後号咷”。○譏笑。詩邶風終風“終風且暴、顧我則笑”。伝“笑、侮之也”。孟子梁惠王上“以五十步笑百步、則何如？”本作“咲”。也作“咲”。」と解説されているように、大きく分けて「歛笑」と「譏笑」との二つの用いられ方がある。そのどちらに傾けて考えるかによって、「笑」の解釈も前述のようにずいぶん異なってくるのである。

結論を先に言えば、この「笑」は、田中謙二氏の言われるように「自嘲の笑い」とするのが妥当である。その理由としては、私の調査によれば『史記』には「笑」という

語が八十例ほど見えるが、そのほとんどが嘲笑・冷笑（まれに苦笑）として使われており、歛喜の笑いの用例が少ないことがまずあげられる。そしてその歛喜の笑いも、「殿上羣臣皆呼万歳、大笑為楽」（巻八高祖本紀）のような抽象動詞としてではなく、顔面の表情を想起させる具象性を持つ動詞として用いられる場合には、「孔子欣然笑曰……」（巻四七孔子世家）「布欣然笑曰……」（巻九一黠布列伝）「上欣然而笑……」（巻九六張丞相列伝）という具合に「欣然」という修飾語をともなうて用いられているのである。そうしてみると、この「項王笑曰……」の「笑」を歛喜の方向で考えようとするのはどうも無理であると思われる。

次に、この時の項羽の心情について推測してみよう。私はこの時の項羽の心情を、亭長の発言の意味をふまえて次のように考える。亭長の言葉は、窮地に陥って東城に向かう途中、田父に騙されるという苦い経験をしている項羽にとって、身にしみてありがたかった。劉子翬が、「為田父所給陷於大沢。亭長之言甚甘、安知不出田父之計耶」（『史記評林』上欄注記）と指摘しているのは、項羽がすぐあとで「吾知公長者」と言っていることからみても、こじつけである。しかし、感謝すると同時に、一介の亭長に「亦足

王也」と説得され、その好意にすがってしか生きのびることのできないみじめな境遇に置かれていることを、項羽ははつきり自覚したのである。さらに、そこに江東に帰ったときの自分の姿を見たのである。亭長の言う「衆数十万人」というのは、尉他の「我孰与皇帝賢」という質問に、陸生が「今王衆不過数十万……譬若漢一郡、王何乃比於漢」（卷九七酈生陸賈列伝）と答えているのからみて、たいした人数ではない。江東に帰ってもせいぜい同情され、わずかに数十万人の王となることしかできない身であることを自覚したのである。この「笑」はそのような自覚から生じたものであり、「笑」の対象は、他人の温情にすがって生きるしかないという、みじめな状況に置かれた自分自身、そのような状況に陥るまで生きのびた自分自身であったと考えられる。以上のように考えてくると、この「笑」は、「自嘲の笑い」と解するのが妥当であろう。

口元を歪め自嘲の笑いをもらしながら、項羽は「天之亡我」とまた繰り返す。それに続くのは「非戦之罪也」ではない。そのことの証明はもうすでに終わっている。望郷の念を断ち切って「我何渡為」と続ける。天がわしを滅ぼすというのにいまだ渡るには及ばぬ。この「我何渡為」の「何…為」の形は、「鴻門之会」にも「我何辞為」とあり、

問題のあるところだが、今は戸川芳郎氏の「その、示す意味は、顔師古が『何用……』『不須……』と注することく、へ……する必要があるか（いまだら……）するには及ばぬ」として、まとめられる」という説明に従っておく。

しばらく間をおいて、静かに回想するのは、さつそうと出陣したころのなつかしい思い出。「且籍与江东子弟八千人、渡江而西」、目の前にあるのはみじめな現実。「今無一人還」と肅然と言いつ切る。もし江を渡って故郷に帰ったと仮定したとき、亭長の言動から推測すれば「江東父兄憐而王我」ということがあるかもしれない。が、精兵八千を失い、敗北した今、その憐れみを受ける資格はないのである。「何面目見之」。

ここの「父兄」と「子弟」の解釈にも問題がある。これまでの翻訳書・注釈書が「父兄」をどう扱っているかを見てみると、「出征家族たち」「親たち」「子弟の家族」と訳したり、「父兄」とそのまま日本語として使っている。しかし、ここの「江東父兄」の「父兄」は、日本語の「父兄」とは違うものであり、上記の訳はすべて誤訳である。というのは、「当時の農村の構造は、父老もしくは父兄と称せられる指導層と、子弟と称せられる青少年層とにわかれていた」と指摘されているように、「父兄」は「父老」と同

義の語で、「子弟」とともに当時の村落(里)の階層を示す言葉なのである。「父兄」が「父老」と同義に用いられることは、たとえば、沛の父老が劉邦を沛の令にしようとして「父老乃率子弟、共殺沛令、開城門迎劉季」たところ、劉邦が「吾非敢自愛。恐能薄不能完父兄子弟」(巻八高祖本紀)と辞退していることや、「沛父兄・諸母・故人日樂飲極驪」(同上)とあるのが、『漢書』巻一高帝紀下では「沛父老・諸母・故人日樂飲極驪」となっていることなどより明らかである。東洋史学の成果に依拠して「父兄」について説明しておく、「父兄」は、「子弟によって父事せられ、兄事せらるべき人という意」で、「里の中に、その共同自営の必要から自らにその位置を生じた経験者」である。その働きは、社の祭の監督指導、里内の土木管轄の管理、公金の取り扱い、里を代表しての郷・県の行事への参加など多面的である。そして特に注目したいのは、ある政権は「父老の承認を通じて、その地域の民の支持を獲得し、徴兵・収租の権をもちえてゆく」という指摘である。項羽も当然、江東の父老に承認され、民の支持を獲得し、「江東子弟八千人」を得て、西に向かったわけである。したがって、「我何面目見之」というその「面目」のなさは、八千人の子弟を死なせてしまい、その親たちに合わせる顔

がないということに限定されるわけではない。もちろんそれを含みつつも、これまで江東の父老から、ということは江東全体の人々から、人的・物的・精神的に多大な援助を受け、期待されながらも、それに応えられないでおめおめと帰る、その面目のなさなのである。いわば江東の衆数十万人に対して、地域共同体全体に対して面目がないのである。「西楚の霸王」と号した項羽にとって、敗北しながら「彼不言」とその責任を棚上げにした形で憐みを受けるのは恥辱に他ならない。「籍独不愧於心乎」(この籍だけは心に恥じずにおられようか)は、敗北という冷徹な事実が存在する以上、同情されればされるほど心に深く食い込む自責の念を、脳裏に浮かぶ江東の衆数十万人に向かって心底から表明しているのである。

ここの「独：乎」という言い方であるが、私は以前から「独」は「何」と同じと理解していて、かつてこの教材を扱ったとき、T社の指導書に、「この籍だけはどうしても心に恥じずにおられよう」と記されているのに気付いた。そこでこれはまさに語法を理解していないところに起因する誤訳の例だと思い込み、第十二回全国連大会の漢文分科会で発表する機会を得たとき、大会のレジュメに、「この『独』は、『…だけ』という限定を表現するものではない



く、『独…乎』という形で、反語を示しているのである。積大典が『ナンゾノ所ニ用ユルコト多シ。何ノ字ヲ用ユルヨリ語意ツヨシ』（『文語解』）と言っているように、この『独』は、『何』と置き換えられるものである。…前記の指導書は、この点が明確でなく、そのため、『（他人はどうあれ）自分だけは』と苦しい説明を付加している<sup>68</sup>と書いた。ところが大会当日の分科会で、T社の編集委員の先生より、「そこは関西のある先生が、多くの用例に基づいて『…だけ』という意味であると主張されており、『独』は『何』と同じだというのは俗説であることです」という御指摘をうけた。関西のある先生というのが、私のひそかに畏敬する先生であっただけに、得意顔でえらいことを書いてしまったと思った。しかし、五十七年度改訂の新指導要領に基づく教科書を見ても、「独…乎」は、「反語の形。ここでは『独』は『何』と同じ」（T社国語Ⅱ）、「なんで…しようか、しない」（G社国語Ⅰ）、「どうして心に恥じることがなかりうか、恥ずかしいことだ」（S社国語Ⅰ）と説明されていて、すべて「独」を「何」と同じと考えている。この問題についてどう考えたらいいかという判定を下す能力は私にはないが、「…だけ」と解したほうが項羽の自責の念が強調され、この場面にはふさわしいよう

に思えるので、とりあえず「この籍だけは」と解しておく。

以上、いろいろ問題点を指摘してきたが、項羽本紀という馴染みの深い教材の、教科書でわずか十行足らずのところにも、ずいぶん問題があることは御理解いただけたのではないかと思う。これが教科書全体ということになれば、漢文教材に限っても相当数の問題点が摘出されるだろうことは言をまたない。それらの摘出・解決に力をつくすことは、研究と教育の結合を大きな目標として掲げる本学会・本誌にとって、その結合のもっともよい方向であると考えられる。小論は思いつきの域を出るものではなく、諸賢の御批判を賜りたいと思うのであるが、小論の意図は今述べたところにあり、その拙い先鞭にでもなれば幸甚である。

#### （注）

- (1) 新指導要領に基づく『国語Ⅰ』『国語Ⅱ』の教科書を調査したところでは、十種の教科書がこの箇所を採録している。
- (2) 田中謙二・一海知義『史記』楚漢編、朝日新聞社、一一一頁。
- (3) 司馬遷自身についても、「司馬遷は天の意志を信じており、天の行為をすなおに肯定している」（加地信行『史記』講談社、

九〇頁）とされている。

(4) 李長之はこの執拗な記述について、「糧食一節則是他的致命傷、篇中都頻頻提及、這都增高了全文的悲劇情調」(『司馬遷之人格与風格』台湾開明書店版、三〇九頁)と述べている。

(5) 芥川竜之介「英雄の器」『全集』第二卷、岩波書店、一二二頁。

(6) 一海知義『史記』筑摩書房、一五九頁。

(7) ただし、『史記』のこのあたりの成り立ちという観点から考えると、また別な説明も可能であろう。私も、「一生竄肩」という語句に着目して「鴻門之会」の成立にふれたことがあるが(拙稿「鴻門の会」の『一生竄肩』『高校通信東書国語』二〇八号)、ここでは本文をそのまま読むという立場から考えていきたい。

(8) 諸橋轍次『遊支雜筆』目黒書店、一三四頁。

(9) 武田泰淳『司馬遷』日本評論社、七五〜七六頁。

(10) 「これからの漢文教育」『中国文化』一九八二年、八二頁。

(11) 陳舜臣『十八史略』2、毎日新聞社、一三二頁。

(12) 丸山松幸・和田武司『史記』Ⅲ、徳間書店、二三五頁。

(13) 田中謙二「史記の〈笑い〉」『東方学報』第四一冊、一三四頁。ただし、この論文の見解のすべてに賛成というわけではない。

(14) 于在春『文言散文的普通話翻訳』三編、上海教育出版社、八一頁。

(15) 『辞源』(修訂本)第三冊、商務印書館、二三四八頁。

(16) 「鴻門の会」にみえる句法については、拙稿「鴻門之会」の句法指導」『国語展望』五八号で分析したことがある。

(17) 戸川芳郎「文末の『為』字について」『漢文教室』一三六号、六頁。なお、西田太一郎「『為』の字の特異な用法」『漢文教室』一三八号、戸川「文末の『為』字について(補)」『漢文教室』一三九号、西田「『為』の字の特異な用法(補)」『漢文教室』一四〇号をも参照。私が昭和四一年からの『全国大学入試問題正解』(旺文社)を調査したところでは、「何…為」の形の文が設問に取り上げられたことはない。

(18) (2)と同じ。一一八頁。

(19) (6)と同じ。一五九頁。

(20) (12)と同じ。二三五頁。

(21) 小竹文夫・小竹武夫『史記』(本紀・書・表・世家篇、筑摩書房、七九頁。野口定男『史記』上、平凡社、一一八頁。吉田賢抗『史記』二(本紀、明治書院、四九九頁。

(22) 西嶋定生『中国の歴史』2、講談社、六九頁。

(23) 守屋美都雄「父老」『中国古代の家族と国家』東洋史研究会、一九八頁。

(24) 前掲書、一九八頁。

(25) 前掲書、二〇四頁。

(26) 拙稿「句法指導について」『全国高等学校国語教育研究連合会第一二回研究大会資料』三〇頁。